カナダ史点描

ビーバーを追って

カルチエのカナダ寄港よりはるか以前から、セント・ローレンス湾一帯ではフランス人漁夫がタラ漁に従事していた。彼らは、インディアンから鉄などと引き換えにビーバーの毛皮をもらい、それをフランスに持ち帰った。そのビーバーの毛皮は、その後のカナダの歴史を大きく書き変えることになる。

カナダが、ビーバーを追って西へ、そして北へと突き進んでいった探検家や貿易商たちによって開拓されたというだけではない。ビーバーは、カナダにおけるフランスとイギリス、そしてさらにインディアンの運命を左右する役割をも演じたのである。

カルチエがカナダを去ってからおよそ六十年も過ぎた十六世紀の末頃になって、ヨーロッパでは、貴族など上流階級の間でフェルト帽（シルクハット）が流行した。ビーバーの体は、針のような長い毛の根元に、やわらかい綿毛が密生していて、フェルト帽にするには最適だった。そのため、ビーバーの毛皮に対する需要が高まり、その主要な生息地である北米大陸は急に探検家や商人の間で脚光を浴びるようになる。

毛皮の取り引きは、当初、セント・ローレンス川およびその支流周辺のアルゴンキン・インディアンとフランス商人との間で行われていた。フランスは、毛皮貿易の基地として、すでに一六〇五年にポート・ロイヤル（現在のノバ・スコシア州アナポリス・ロイヤル）に、一六〇八年にはケベックに植民地を建設していたが、国内では四十年にわたる宗教上の内戦（ユグノー戦争）が続いて、植民地経営どころではなかった。

そこで、国王は裕福な貴族や商人に対し、植民地を建設するなどの条件と引き換えに、特定の地域内で土地を所有し、税金を徴収し、治安を維持し、かつ貿易を独占する権利（特許）を与えた。ところが植民をすれば金がかかるだけでなく、ビーバーの生息地を狭めることになるため、これらの貴族や商人たちの会社は毛皮取り引きだけに熱中する。

フランスは、当初から民間にカナダ植民地の経営をまかせ、その民間業者は新植民地の定住・開拓よりも、目の前の利益を追うことだけに興味を示したのである。

そのことは、カルチエがケベックやモントリオールに達した一五三五年からおよそ百年たった一六四一年になっても、カナダの全白人人口がわずか三百人程度にとどまった事実からも察せられよう。

さて、毛皮貿易はどういう風になりたっていただろうか。

当時、セント・ローレンス川流域に住んでいたのは、アルゴンキン族のインディアンであった。彼らは狩猟を営む漂浪の民で、木と獣骨で作った弓矢やワナを用いて動物をしとめ、肉は食料に、毛皮は衣服に利用していた。

その彼らがヨーロッパ人と初めて接触したとき、彼らは自分たちが提供できる唯一の品物である毛皮と毛皮で作った服を、ヨーロッパの品々、特に最も欲しがっていた鉄と交換した。それが毛皮貿易の始まりである。ヨーロッパでビーバーの毛皮に対する需要が急速に高まるとともに、この物々交換もだんだん規模が大きくなり、貿易地域も広がっていく。

やがて、国王から特許を得た会社が進出してくると、インディアン→毛皮商人→会社という流通機構が生まれた。最初はインディアンが、直接ケベック、モントリオール、トロワ・リビエールといった町に毛皮を持ち込んでくるのが常であったが、狩猟場が遠くなると、インディアンと町の交易所の間で仲介をする人たちがでてきた。

クラー・ダボワ、すなわち「森を駆ける男たち」と呼ばれる人たちがそうである。これらの男たちは、歴史家ケアレスの表現を借りると、「カヌーと雪ぐつで旅をし、鹿皮の服を着て鹿皮の靴（モカシン）をはき、木の皮で作った小屋や木の枝をかぶせただけの差しかけ小屋に寝

インディアン語からきた「カナダ」

「カナダ」という名前は、〝集落〟を意味するイロクォイ族インディアンの〝カナタ〟または〝カナッタ〟という言葉に由来するといわれている。

一五三四年にセント・ローレンス川を通ってスタダコーナというインディアンの部落（今日のケベック市）に達したフランスの探検家ジャック・カルチエは、インディアンの酋長からこの言葉を聞いて、国の名前だと勘違いしたらしい。

カルチエが航海記（一五三五年）の中で書いた「カナダ」は、セント・ローレンス川流域のほんの一部を指すだけであった。しかしやがてセント・ローレンス川一帯を意味するようになり、フランスがケベックに植民地ニュー・フランスを建設した頃になると、ニュー・フランス全体が一般的にはカナダと呼ばれ、そこで生まれた人々はカナディアンと称されていた。

英国がニュー・フランスを征服したあと、フランス系住民だけが「カナダ人」と呼ばれたが、だんだん英国系住民を含めたすべての住民を指すようになった。